

私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器・感染症内科」

信州大学医学部内科学第一講座

牛木 淳 人

この原稿の依頼をいただき改めて振り返りますと、私は自分にとっての医師のイメージと一致する診療科ということで呼吸器・感染症内科を選んだのではないかと思います。

臨床実習が始まるまでの私にとっての医師のイメージといえば、小説やTVドラマで活躍する外科医や内科医でした。そのため私も漠然と外科や内科などの診療科を志望していました。実際に臨床実習が始まり、初めに実習した某診療科で初日の午前中に手術見学がありました。その日は部活動の早朝練習後、まともに朝食も摂らずに実習に出席したことも影響し、見学中に気分が悪くなり、そのまま手術室の隅の方で休んでしまいました。この出来事を経験してからは、自分には手術がある診療科は向かないと思い、内科を選択することとしました。

さらに自分にとっての医師のイメージといえば聴診

器と胸部X線写真でした。そこで、当時呼吸器内科と循環器内科を中心に診療していた第一内科に入局しました。そして大学病院などで研修を重ねると、呼吸器内科は私のイメージする内科とぴったりと一致することがわかりました。すなわち全身の管理ができ、腫瘍・アレルギー・感染症など様々な疾患に対応できる診療科であったのです。こうして私は呼吸器内科を選択しました。

私は現在呼吸器内科だけでなく、感染症内科も専門としていますが、その契機は結核病棟での勤務経験です。そこには多剤耐性結核により生涯病院から退院できない、一見すると元気な肺結核患者がいました。不適切な治療により退院できなくなってしまった患者をみた時に、感染症に対する適切な診療の必要性を痛感し、感染症内科も専門にしたいと思ったのです。

呼吸器・感染症内科に限らず、患者さんの病歴を尋ね、身体所見から鑑別診断を挙げ、検査により診断を確定するという過程は特に内科の醍醐味だと思っています。生まれ変わってもう一度医師になれると言われたら躊躇するかもしれませんが、もう一度内科医になれると言われたら迷わずなりたいと思います。

(信大平14年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器・感染症内科」

信州大学医学部内科学第一講座

立石 一成

呼吸器内科を志したのは大学5年生の時です。それまで身近な人間に医師がいない自分にとっては、具体的な医師像を思い浮かべることができませんでした。それでも、自分が医師になったら「聴診器を手放さないこと」と「患者の最期の瞬間まで関わること」ができる科に進もうということは決めていました。

大学5年生になり、臨床実習では様々な診療科で学ぶようになりました。初めて実際に働く先輩医師の姿に接するようになり、そんな中で出会った3人の呼吸器内科の先生が印象的でした。当時の自分には仕事の内容の大変さはわかりませんでした。毎日夜遅くまで院内を駆け回り、仕事をされていました。その姿は普段からどことなく疲れた様子なのですが、患者さんが最期の時を迎えるとき、患者さんや御家族への対応

が、厳しい瞬間である中でも神聖な印象を受け、自分の中での医師のイメージと一致していました。1人の先生には自分の祖父を看取っていただき、3人の先生の姿は今でも自分自身が医療に臨むうえでのロールモデルにさせていただいています。

そのようなことから、呼吸器内科を志すようになり、信州大学の呼吸器・感染症内科に加えていただきました。今の仕事は、患者さんの容体が急激に変化することもあり、治療が難しい疾患も多く、初対面の患者さんやその御家族に命の危険が訪れていることを説明しなければならぬなど、大変なことも多いです。しかし、自分が人の最期の時間にどのように関わっていかれるかを日々考える中で、自分が目標としていた形で医療に携われていることも実感しています。

現在の自分は「どことなく疲れた」姿にはなれていますが、より頼れる姿になっていけるように、日々診療にあたりたいと思います。自分の成長が実感出来たら新しい聴診器を購入しようと決めていましたが、未だに学生時代と同じ聴診器を使っています。

(聖マリアンナ医科大平18年卒)